

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04368

研究課題名（和文）幼児期における特定の「親密な友達」の形成過程：「仲間づくり活動」の縦断的観察から

研究課題名（英文）The formation process of specific "intimate friends" in early childhood: from longitudinal observations of peer- group formation activities

研究代表者

河原 紀子 (KAWAHARA, Noriko)

国立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：90367087

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）： 幼児期における「親密な友達」の形成過程を明らかにするために、幼児へのインタビュー、保育場面の観察などを継続的に実施した。その結果、3歳児は「親密な友達」が時間経過の中で変化しやすく、4歳から5歳前半では「遊ぶ友達」の継続性・一貫性、相互に選択し合う関係が見られた。さらに、5歳後半には「親密な友達」とはいつも一緒に遊ぶとは限らず、好意的な感情をもつ「仲良しの友達」として認識され、それらは就学後2～4か月継続する可能性が示された。また、「仲間づくり活動」における子ども同士の社会的相互作用の特徴を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかにされた幼児期の「親密な友達」の形成過程の特徴は、幼児の仲間関係の発達の理解、保育における集団づくりや子ども同士の関係づくりを進める上で有益な知見である。加えて、幼児期の「親密な友達」の認識が就学後も継続する可能性はコロナ禍という特殊な状況における貴重な知見でもある。また、保育における「仲間づくり活動」で行われる「話し合い」は、子ども同士の意見表明・交換を促す取り組みであり、「子どもの権利条約」に規定された「意見表明権」を保障する意義あるものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to clarify the formation process of "intimate friends" in early childhood. Interviews with twenty-one young children, ratings by five caregivers, and observations of childcare situations were conducted longitudinally for three years. The results showed that "intimate friends" were likely to change over time for 3-year-olds, while continuity and consistency in "friends to play with" and mutually selective relationships were shown from 4 to the early half of 5th year of age. Furthermore, in the latter half of the 5th year, "intimate friends" were not always playing together, but were recognized as "good friends" with positive feelings, and these relationships were likely to continue for 2-4 months after entering elementary school. The characteristics of social interactions among children in peer-group formation activities were also shown.

研究分野：発達心理学

キーワード：親密な友達 幼児 仲間関係 仲間づくり活動 縦断研究

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

わが国では3歳になると、幼稚園への入園、保育園や認定こども園において乳児クラスから幼児クラスへ進級することにより、それまでの大人（親や保育者）と子どもの関わりだけでなく、子ども同士の相互作用も活発になる。そのため、保育実践において保育者と子どもとの直接的かわりだけでなく、子ども同士の相互作用をいかにつなぎ、「仲間づくり」を促していくかという間接的な対応が求められる。幼児期は、そのような相互作用を通して、仲間関係や社会性を育む重要な時期である。

幼児は、園生活を送る上で、まずは「安心」できる大人との関係を基盤に、「安心」できる他児との関係、さらに特定の他児との親密な関係を築いていく。このような他児との関係は、近年注目されてきた社会情動的スキルを育てる上で重要な役割を果たすと考えられている。

わが国における幼児期の仲間関係に関する研究は、主として「個体能力の変化」と「関係性の変化」の2つの側面から検討されてきた（及川，2016）。幼児の親密性に着目した研究もこの2つの軸から見るができる。前者の「個体能力の変化」に関する研究では、仮想実験により、仲間関係の親密度の高低と対人葛藤場面で用いられる自己主張の方略や行動特性の理解または謝罪行動の種類などとの関連について検討され、概ね親密性が高い方が社会的に望ましい行動が可能であるとされてきた（山本，1995；原，1995；中川・山崎，2004）。しかし、ここでの親密性とは、仮想的に親密である群とそうでない群に対象児を振り分けられたもので、子どもたちが実際にそのような親密な友達が存在しているのか、現実場面での行動と一致したものかといった点は明らかではない。一方、「関係性の変化」に注目した研究では、保育場面の観察記録から、3歳児クラスの幼児に特定の二者間に親密性が形成されるとの知見はあるが、いざこざなどの葛藤状況を経験することによって不安定となり、第三者も含めた新たな関係へ変化していく（高櫻，2007）。4、5歳児については「遊びたい子」かどうかや同じ仲間集団に属する子かどうかによって、仲間入りの成否やいざこざの方略が異なる（倉持・柴坂，1999；倉持，1992）など、「親密な友達」かどうかがある行動を決定する際の条件として扱われているに過ぎない。「一緒に遊びたい」「仲が良い」「好きな」子（「友達」）はいるのかどうか、また相互に選択し合う関係性は見られるのか、すなわち「親密な友達」が3歳から就学までの幼児期を通じてどのように形成されるのか、そのプロセスについては十分な検討がされていない。

保育の中で、子どもたちはクラス全体で活動することもあれば、意図的無意図的に小グループで活動することもある。意図的な場合は、保育者がグループ内での子ども同士の相互作用、集団としての育ちを見通して、グループのメンバーや組み合わせを検討する。一方、子どもたちにとって同じグループになることは、メンバーの子どもとのやりとりの頻度や特定の「親密な友達」が形成される一つのきっかけになると考えられる。本研究では、そのような取り組みの一つである少人数の「グループ活動」や「リーダー活動」といった「仲間づくり活動」に着目する。

### 2. 研究の目的

本研究では、以下の三点について検討することを目的とする。

第一に、3歳から就学前までの幼児期を通じて、「親密な友達」の形成過程にはどのような特徴が見られるのか、その変遷ないしは一貫性・継続性を含むプロセスについて明らかにする。

第二に、幼児期の「親密な友達」についての認識・関係は就学後どのように継続・変化するのか、その特徴について探索的に検討する。

第三に、「仲間づくり活動」における子ども同士の社会的相互作用の特徴、特に「話し合い」場面における子ども同士の意見の対立や調整について検討する。

### 3. 研究の方法

本研究では、幼児へのインタビュー、保育者による評価（調査）、保育場面の観察、さらに保護者へのアンケートなど多様な研究方法を用いた。

#### (1) 幼児へのインタビュー

研究協力者： 都内A保育園の幼児21名（男児：10名、女児11名、ただし、3歳児の年度途中から入所した女児1名、4歳児の年度末で退所した男児1名を含む）。インタビュー実施時期：原則として、3歳児、4歳児、5歳児の各年度初めから2か月経過した6月とその半年後の12月、各年度2回（前半・後半）×3年、合計6回実施した。平均月齢（SD）は表1に示した。インタビューの手続き：月に2～5回、午前からの保育に参加して子ども同士の遊びや活動等を観察し、幼児とのラポール形成に努めた。インタビューは主に昼食後から午睡前までの自由遊び時間に、インタビューアと1対1の場面で、簡単に答えられる日常的な質問をした後、「親密な友達」として、「いつも一緒に遊んでいる友達」「仲良しの友達」について尋ねた。インタビュー場面はデジタルビデオカメラ

表1インタビュー実施時の月齢と標準偏差

	人数	月齢（年齢）	SD（か月）
3歳前半	20	45.4（3歳8か月）	3.6
3歳後半	21	51.5（4歳3か月）	3.8
4歳前半	21	56.8（4歳7か月）	3.9
4歳後半	21	62.8（5歳2か月）	3.9
5歳前半	20	69.0（5歳8か月）	3.9
5歳後半	20	74.8（6歳2か月）	3.9

ラで記録された。

#### (2) 担任保育者による評価

研究協力者： 3、4、5歳児クラスの担任保育者、各クラス2名、ただし3歳児の担任のうち1名は、5歳児でも再び担任となったため、計5名。保育者の経験年数は、最短1年目、最長24年、平均10年だった。調査時期： 幼児のインタビューとほぼ同時期（年2回×3年、計6回）に調査用紙を配付し記入を依頼した。調査内容： 各クラスの幼児それぞれについて、「いつも一緒に遊ぶ仲良し友達」がいるかどうか、「いる」場合には3名まで実名を挙げてもらい、仲良しの程度について3段階で評価してもらった。また、それらをどのような場面・行動から判断したか、クラスの仲間関係の特徴等についても記入してもらった。

#### (3) 幼児の保護者への質問紙調査

研究協力者： 上記の幼児の保護者のうち調査への協力・回答が得られた12名。調査時期： 卒園直前にパンデミックとなったため、小学生の分散登校開始から約2か月後の7月下旬～8月上旬に行った。調査内容： 家庭での親子のやりとりの中で、保育園、学童保育所、小学校それぞれの友達についてどのような内容、頻度で話題になるか、またそれらの友達とのやりとりや遊び・活動の内容、頻度等について尋ねた。調査用紙は自宅への郵送・返送と保育園での配布・回収のうちいずれか保護者の希望した方法で実施した。

#### (4) 保育場面（仲間づくり活動）の観察

上述の都内A保育園3歳児クラスから5歳児クラスまで、同一集団を約3年間、月に2～5回、午前の自由遊びから午睡前までの保育の様子をデジタルビデオカメラで観察・記録した（昼食及びインタビュー時間を除く）。ここでは、「仲間づくり活動」の中でも特に＜グループ活動＞や＜リーダー活動＞における「話し合い」の場面を分析対象とした。

研究の開始にあたって、園長及び幼児の保護者から文書による同意を得た。また、共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理委員会の承認を得た（KWUIRBA#17113）。

### 4. 研究成果

#### (1) 幼児期における「親密な友達」の形成過程

幼児のインタビューと保育者評価の結果は以下のとおりである。

##### 「親密な友達」の人数

「いつも一緒に遊んでいる友達」（以下、「遊ぶ友達」）や「仲良しの友達」は誰か尋ねたことに対し、回答した「友達」の人数を各時期でカウントした。その結果、「遊ぶ友達」の平均人数は3歳前半の1.71人が最少で、5歳前半の4.43人が最多、同様に「仲良しの友達」は、3歳前半の1.67人が最少で、5歳後半の4.33人が最多と、5歳児の人数が相対的に多かったが、いずれも有意差は認められなかった。

##### 「特定の友達」の継続性

次に、「遊ぶ友達」や「仲良しの友達」の継続性について検討するため、隣接する2つの時期（例えば、3歳前半と後半、3歳後半と4歳前半など）で同一の友達の名前を回答した幼児の割合について調べた（図1）。その結果、「遊ぶ友達」については、＜3歳前半 - 後半＞の19.0%に比べて＜4歳前半 - 4歳後半＞74.1%、＜4歳後半 - 5歳前半＞では66.7%と、一致する名前を回答した幼児が有意に増加した（いずれも $p < .05$ ）。つまり、4歳児クラスから5歳児クラスの初めにかけて、「遊ぶ友達」の継続性、一貫性が見られることが示された。しかし、「仲良しの友達」の割合については、年齢が上がるにつれて相対的に増加したが、有意な差は認められなかった。

##### 幼児同士の相互選択

上述の「遊ぶ友達」や「仲良しの友達」について、幼児同士、相互に選択し合う関係が見られるかどうかを調べた（図2）。その結果、「遊ぶ友達」における相互選択の割合は、3歳前半の9.5%と比べて4歳後半57.1%（ $p < .05$ ）、5歳前半61.9%（ $p < .01$ ）と有意な増加が見られた。しかし、5歳後半には38.1%と相互選択の割合が相対的に減少した。これに対し、「仲良しの友達」の相

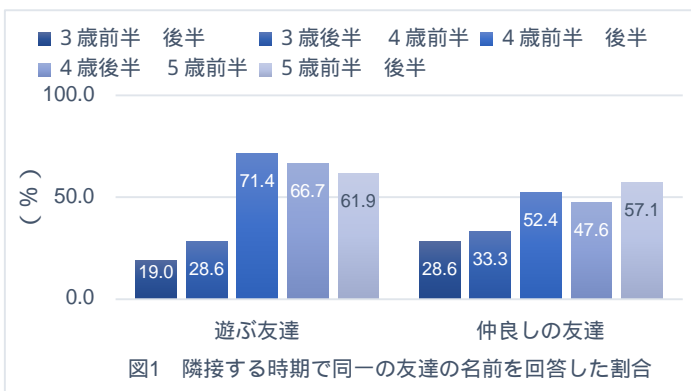


図1 隣接する時期で同一の友達の名前を回答した割合

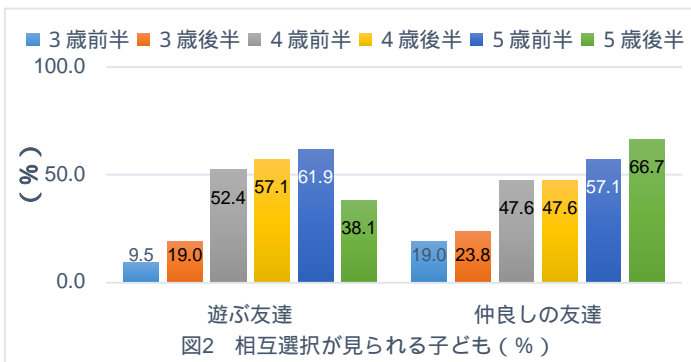


図2 相互選択が見られる子ども（%）

互選択の割合は、3歳前半の19.0%と比べて5歳後半で66.7%と有意に増大することが明らかとなった( $p<.05$ )。これらの相互選択における5歳後半の変化の背景には、幼児の「特定の友達」についての認識の変化があるのではないかと考えられる。インタビュー時の幼児の回答から、「遊ぶ友達」と「仲良しの友達」を同一と考えていると判断できる場合もあれば、5歳後半の「遊ぶ友達」への回答には「みんな」「全員」などが複数見られ、「いつも(一緒に遊ぶ友達)はいない」が「好きなのは ちゃんだけ」という発言もあった。つまり、5歳後半になると、広くクラス全体の友達と遊ぶようになり、「特定の友達」とはいつも遊ぶわけではないが、「仲良しの友達」として認識するのではないかと考えられる。そのため、5歳後半で「遊ぶ友達」の相互選択は減少し、「仲良しの友達」の相互選択の割合が増大したと推測される。

#### 保育者評価との比較

次に、「親密な友達」についての幼児の認識と保育者の評価にはどのような関連が見られるのか検討した。幼児の回答と保育者の評価の一致率を調べた結果、「遊ぶ友達」では3歳前半の28.6%と比べて4歳後半で90.5%と有意に増加したが( $p<.05$ )、5歳前半になると23.8%と急激に減少した( $p<.01$ )。この背景には、まず4歳前半から後半にかけて、それ以前より幼児の「遊ぶ友達」に継続性、一貫性が見られるようになったことが一致率の増大につながった可能性が考えられる。一方、5歳で一致率が低下したのは、「遊ぶ友達」は必ずしも相互選択し合うような親密な関係とは限らないため、保育者と幼児の認識にズレが生じた可能性、あるいは「親密な友達」についての認識や評価基準が各年齢の保育者間で異なっていた可能性などが考えられる。

以上の結果から、3歳児では「親密な友達」の人数は相対的に少なく、その対象が時間経過の中で変化しやすいが、4歳前半から5歳前半にかけてその人数は相対的に増加し、「遊ぶ友だち」の継続性・一貫性が見られ始め、相互に選択し合う関係になること、4歳後半では子どもの回答と保育者の評価との一致率が高くなり、さらに5歳後半以降は「親密な友達」とはいつも一緒に遊ぶとは限らないが、好意的な感情をもつ「仲良しの友達」として認識するようになるプロセスが示された。

#### (2) 就学後の「親密な友達」の認識・関係に見られる特徴

幼児期における「親密な友達」の認識・関係は、就学後どのように継続・変化するのか、その特徴について、保護者へのアンケート調査により探索的に検討した。その結果、まず回答が得られた12名とも1名以上の「保育園の友達」と同じ小学校に入学し、そのうち半数以上が保育園の「年長時の仲良し」の友達と一緒にだった。家族との会話では、4月~7月を通して「保育園の友達」に関する話題が多く、「小学校の友達」の話題を「よくする」ようになったのは7月以降であった。古川・小泉・浅川(1992)によれば、早ければ入学後すぐに、遅くとも2か月後には、同じ園出身の友達以外の新たな友達が最も身近な友達になる子どもが多く、顔見知りといった物理的(地理的)要因による友達関係の再編成が行われるという。しかし本研究では、保育園から小学校への移行期がコロナ禍となり、マスク着用で友達の顔がわかりにくい、友達との会話が制限されたことなどから、顔見知りである「保育園の友達」の話題が多く、小学校再開から2か月目でようやく新たな友達の話題が挙がるようになった。また、6,7月の「年長時の仲良し」の話題では、同じ小学校に「年長時の仲良し」が「いる」場合に、一緒にした遊びや活動など実際に行った行動や会話の内容が挙げられていただけでなく、「年長時の仲良し」が同じ小学校に「いない」場合でも、その友達がどうしているか気かけたり、一緒に遊びたい願望があったりするなど、「年長時の仲良し」への思いが継続していることが読み取れた。コロナ禍で新たな友達とのかかわりが制限されているもとで、就学前までの「親密な友達」の存在が支えになっていたのではないかと推測される。そのほか、小学校や学童保育所での新たな友達とかかわるには共通したきっかけがあることが示唆され、移行期における友達関係への配慮や支援について述べた。

#### (3) 「仲間づくり活動」に見られる社会的相互作用の特徴

保育における「仲間づくり活動」の取り組みとして、3歳児では<2人組>、4歳児では4,5人の<グループ活動>、5歳児では各グループから1名選出して行われる<リーダー活動>を観察した。<2人組>や<グループ活動>に初めて取り組む際、担任保育者はその活動が子どもにとって楽しいと感じられるようメンバーの組み合わせに配慮していた。

ここでは主に、担任保育者より、4歳前半で「いつも一緒に遊ぶ仲良し友達」が「いない」と評価された事例(C美)に注目し、グループでの「話し合い」場面の分析を行った。初めての「話し合い」はC美が4歳前半、2回目は4歳後半であった。1グループは4名(C美を含む)で、C美以外の他児は1回目と2回目で異なっていた。「話し合い」のテーマは、いずれも「グループの名前決め」で1回目は「動物」、2回目は「果物」から1つ選んで決めることが求められた。初めての「話し合い」では、C美以外の3名は自分の希望を主張する一方で、他児の意見を聴いたり、それを受けて応えたり、複数の候補から1つに決めるために自分の意見を変えたりする調整が見られた。しかし、C美はそのような反応・調整が見られず、自分の希望を一方向的に主張す

ることが特徴であった。それに対し、初めての「話し合い」から約4か月後の2回目の「話し合い」になると、C美は他児の意見を受けてそれに関連する自分の意見を言うだけでなく、複数の候補から1つの名前に決めるための方向性を提案し、他児もそれに賛成する様子が見られるようになった。〈グループ活動〉では、このような話し合いを始め、遊びの一部や食事、係活動などを同じ4人のメンバーで行っていた。C美が4歳時に回答した「親密な友達」とグループのメンバーとの明確な関連は見られなかったが、上述のC美の変化の背景には、〈グループ活動〉における他児との社会的相互作用の経験との関連が示唆される。つまり、このようなグループ活動の中で他児と話し合う多様な機会・経験こそが、幼児の生活や遊びの中での他児とのやりとりに重要な役割を果たすのではないかと考えられる。このほか、5歳児の〈リーダー活動〉におけるリーダー決めの「話し合い」において、リーダーになりたいけれども他児からネガティブな評価をされて葛藤したり、リーダーになれなかった経験を通して自身の行動やふるまいを振り返ったり、自分も他児もリーダーになりたい思いの中で葛藤し自己抑制が迫られる中で育っていく事例についても検討した。

#### (4) 本研究の国内外における位置づけとインパクト

本研究では、幼児へのインタビューと保育者による評価及び保育場面の観察、さらに保護者へのアンケートなど多様な研究方法を用いて、3歳から就学前までの幼児期における特定の「親密な友達」の形成過程の特徴について明らかにした。すなわち、4歳前半から5歳前半にかけて、「遊ぶ友達」の継続性・一貫性が見られ始め、相互に選択し合う関係になるとともに、4歳後半では保育者の評価との一致率も高くなること、さらに、5歳後半から「親密な友達」とはいつも一緒に遊ぶとは限らないが、好意的な感情をもつ「仲良しの友達」として認識するようになるプロセスである。幼児期の「親密な友達」に関する認識は、就学後2~4か月継続する可能性についても、コロナ禍という特殊な状況において、仮説的に示した。これらは、同一の子どもたちを約3年間継続的に追跡して明らかにしたもので、幼児の仲間関係の発達の理解についてインパクトをもたらす新たな知見となるだけでなく、保育における集団づくりや子ども同士の関係づくりを進める上でも有益な知見となる。また、保育における「仲間づくり活動」で行われる「話し合い」は、子ども同士の意見表明・交換を促す取り組みであり、「子どもの権利条約」に規定された「意見表明権」を保障するものとして意義あるものである。

#### (5) 今後の展望

今後は、「親密な友達」のタイプ分けや個人差、「親密な友達」が見られない事例などに注目して、「仲間づくり活動」で注目した「話し合い」について、保育者の意図なども含めて検討していきたい。

#### <引用文献>

- 古川雅文・小泉令三・浅川潔司(1992)小・中・高等学校を通した移行 山本多喜司・S・ワップナー(編著)人生移行の発達心理学, 北大路書房, pp.152-178.
- 謝文慧・山崎晃(2001). 3,4歳男児の友だち集団の特徴: 個人行動及び二者関係と優勢順位との関連. 発達心理学研究 12(1), 24-35.
- 原孝成(1995). 幼児における友だちの行動特性の理解 友だちの行動予測と意図. 心理学研究, 65, 419-427.
- 倉持清美(1992). 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ: いざこざで使用される方略と子ども同士の関係. 発達心理学研究 3(1), 1-8.
- 倉持清美・柴坂寿子(1999). クラス集団における幼児間の認識と仲間入り行動. 心理学研究 70(4), 301-309.
- 中川美和・山崎晃(2004). 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. 教育心理学研究, 52, 159-169.
- 及川智博(2016). 幼児期における仲間関係に関する研究の動向: 個体能力論と関係論の循環の先へ. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 126, 75-99.
- 高櫻綾子(2007). 3歳児における親密性の形成過程についての事例検討. 保育学研究, 45(1), 23-33.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 巻 23
2. 論文標題 絆の音楽性：乳幼児と養育者のあわいにあるもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 513 - 518
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 巻 33
2. 論文標題 逆境体験からみた縦断研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 221 - 233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河原紀子	4. 巻 68
2. 論文標題 4、5歳児におけるグループでの「話し合い」に関する予備的検討 合意形成過程に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河原紀子	4. 巻 67
2. 論文標題 保護者アンケートにみる保育園から小学校への移行期における友だち関係：コロナ禍により友だちとの接触が制限されたことを考慮して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 29 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河原紀子	4. 巻 66
2. 論文標題 幼児期における「友だち」の認識：インタビュー調査による短期縦断的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	6. 最初と最後の頁 133 - 140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河原紀子	4. 巻 25
2. 論文標題 幼児期における「親密な友だち」の発達の特徴：横断的検討から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 87-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 巻 71
2. 論文標題 日本の子育てを考える：アロマザリング・国際比較から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 河原紀子
2. 発表標題 5歳児におけるリーダー決めの話し合いの事例的検討－自己認識の変化に着目して－
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 河原紀子
2. 発表標題 幼児期における「特定の友だち」関係の認識(2) 幼児の回答と保育者評価の比較による縦断的検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kawahara, N & Negayama, K.
2. 発表標題 A longitudinal study of the formation of peer relationships in early childhood.
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology. 2020+(Online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河原紀子
2. 発表標題 幼児期における「特定の友だち」関係の認識 インタビュー調査による縦断的検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河原紀子
2. 発表標題 4歳児におけるグループでの話し合いの展開過程 初めての話し合いで意見調整が見られなかった事例に着目して
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 Kawahara, N & Negayama, K.
2. 発表標題 Dyadic analysis of peer relationships in 3-year-olds: Comparison of children's sociometric data and teachers' reports
3. 学会等名 29th Annual Meeting 2019 EECERA (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河原紀子
2. 発表標題 4歳児における「友だち」の認識 子どもの回答と保育者の評価の比較から
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawahara, N & Negayama, K.
2. 発表標題 The perception of intimate friends in preschool children: A comparison between children and nursery teachers.
3. 学会等名 25th Biennial Meeting 2018 ISSBD (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河原紀子・根ヶ山光一
2. 発表標題 幼児期における「友だち」の認識：縦断的検討から
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河原紀子
2. 発表標題 幼児期における「友だち」の認識
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 根ヶ山光一・外山紀子・河原紀子ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 464
3. 書名 からだがたどる発達	

1. 著者名 根ヶ山光一・外山紀子・宮内洋	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 185
3. 書名 共有する子育て：沖縄多良間島のアロマザリングに学ぶ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	根ヶ山 光一  (Negayama Koichi)  (00112003)	早稲田大学・人間科学学術院・名誉教授   (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------